

## 名前の変移・変更・変形とタブー

前回まで考察してきた太鼓名は、その人の口語の名前とは異なっていた。それは、太鼓言語には、各単語の音節ごとの声調の高低2項対立のみを伝達するという本質的な制約があるゆえである。太鼓言語では、声調上の数多い同音異義語との差別化を図ろうとしてどの単語も修飾を施される結果、必然的にそうなるのだ。これは、「言語」の音声構造上の制約が名前の表現形態を制限して変形させる場合で、狭義の言語（有節言語）がそれと相同の「言語」体系を同時に持つという、特殊な状況である。

## ■タブーの次元

もっと広く見られる名前の便宜的な変更や変形は、言語に内在する構造的要因のゆえではなく、文化的な要因、即ちタブー（禁忌）の影響によるものである。それは、リーチが正しく指摘した通り、「～してはならない」というタブーの規制が行為だけでなく、心理と言語の次元でも連動して作用するからである [Leach, E., *Culture and Communication*, 1976]。

例えば、死の恐怖に基づく強いタブーでは、死者の物理的痕跡に関わることが忌まれるだけでなく、その名前を挙げたり想起することも禁じられ、違反は不道徳で不吉だとされる。しかも、このタブーは明示的な言動に限らず、夢の中での言動や情緒にも適用され得る。なぜなら、産業化以前の社会の多くでは、夢もまた現と並ぶ一つの現実であると考えられたからだ。

## ■タブーと名前

仮に言語的次元を名前に限ってみれば、タブーへの対応を略々4つの水準に区別できそうだ。  
①（ある名前の）完全な言及禁止、②別の名前への変更、③別の名前による言い換え、④一般

的な名称による言い換え、がそれだ。

ただ、各項目は必ずしも排他的な関係になく、一つの目安に過ぎない。また、タブーの適用されるのが、a) 或る人間集団全体か、それとも特定のカテゴリーの人々か、b) あらゆる時か、特殊な状況のみか、等も考慮する必要がある。

産業化以前の社会では誰もが複数の名前をもつので、c) どのカテゴリーの名前がタブーの対象か、も重要だ。この点の考察は、個人の複数の名前の位相とその相互関係を解きほぐし、名前とは何かを読み解く重要な糸口となろう。

ともあれ重要なのは、こうした分析を再度総合できるパースペクティブを獲得することだ。

## ■タブーと言語

その要点を簡略に示してみよう。言語による外部環境の分節（「言分け」）は、身体による生得的な分節（「身分け」）を圧倒する過剰な分節方法で、存在の根源的な喚起力となる。産業化以前、人々は言語によって緊密に組織された全体的な秩序を生きた。その秩序は儀礼、神話、分類体系、作法、身振り等を介して不断に意識化されるのみか、身体感覚にまで浸透していた。だが、一貫した全体論的な硬い秩序は逆にその限界を露呈させ易く、絶えず混沌への不安を生む。だから、防衛のために共同体内外の区分が強調されると共に、共同体の内部でも自他区分の確認が常に問題にされる [小馬徹「命名と禁忌」、『月刊言語』26 (4), 1997]。

秩序に属さない「外なるもの」は、人間と社会を超えた強力な「力」を感得させるが、魔物や邪術のように常に邪悪なものとされるとは限らない。妖精、天使、神仏等のように善なるものとしても、あるいは人間の理解を超えた両義的なものとしても観念され、形象化されてきた。

要するに、それは「自然」の力なのである。文化は人間が言語の分節によって作り出した秩序だが、混沌たる反秩序が自然として文化を脅かす。ただし、この「自然」は、動物にとっての外部環境である自然では決してなく、秩序の外部、つまり文化の剰余概念なのである。

当然個人の名前も、秩序としての文化に属している。そして、共同体の内部では、その排他性のゆえに、「取り込まれた外部」が強く意識されて問題となり、名前が秘匿されたのだ。

### ■死者と生者

さて、再び名前とタブーに立ち返り、①～④を考えよう。生者への①の適用は、共同体からの抹殺を意味する。だから、無名のまま生存を許されるのは、西アフリカのカソンケ社会のごとく、物とみなされた奴隷だけである。一方、死者は恐れられ、往々追い払われ、名前を奪われる。ケニアのキプシギスでは、まだ祖霊(oindet、直訳は「一昨日の者」)として父子子孫に再来する以前の死者の名前は忌避され、「昨日の者」(chichi-gonye)と呼ばれる——④。

ルアンダやブルンジの〔バ〕ヒマ人は、死んだ王の名前だけでなく、彼の名前の出所となった動物の名称も語彙から抹殺した。例えば、王がライオンに因んで命名されていれば、ライオンの名称を変えたのだ。ほぼ同様の事情は、南アのズールー人の王についても見られた[Frazer, J. G., *The Golden Bough*, 1913]。

ただし、最も重要な名前(本名)を秘匿するのは、既に見た通り、一般的な傾向である。この場合、生者は、②か③の措置が必要になる。生者の名前を死者の霊魂から遠ざける慣行も珍しくない。北アメリカ先住民の間では、死者の近親者全員が名前を付け替えた。また、死者と同名の者は服喪中名前を変えたが、ロッキー山脈東部の諸部族ではその変更は恒久化された。それは、馴染みの名前を聞くと死者の魂が舞い戻ると信じていたからだ[ibid.]。

M.フォーテスは、子孫の保護者として祖先崇拜の対象となる死者を祖霊、恐れて遠ざけられ

る死者を死霊と呼んで区別した。この区別は重要だ。上記のような諸々の事柄は、ある人間集団の死者が祖霊と死霊のいずれとして観念されているかに大きく関わっているといえよう。

### ■内と外、そして女性

さて③・④には、次のような例もある。ベニンのダホメの王の名前は、危害を恐れて嚴重に秘匿され、「強い名前」と呼ばれる称号だけが人々に知らされた[ibid.]。また、キプシギスでは、猛獣や妖怪の存在を身近に感じる状況では、別の名称で言及した——日本の猟師や漁師の職域での用語が連想される。また、恐れられた存在である予言者たちについては、予言者という語もその個人名も避け、婉曲語法を用いた。しかも、予言者は人々と直接口をきかなかった。

では、名前の秘匿される側が人か「力」が一定せず、時には王などの特別の存在なのはなぜか。どの場合も、要点は他のカテゴリーとの関係性であり、コミュニケーションの是非である点を見逃してはならない。共同体という文化秩序の一部をなす名前とは公的なものであるから何らかの形で流通すべきものだが、秩序からはみ出したものとのコミュニケーションは厳しく制限され、名前は秘匿されるのである。そして、往々王の名前が秘匿されるのは、内外秩序の重層化のゆえである。また、キプシギスの間で予言者とのコミュニケーションが阻まれたのは、彼らが異民族マサイ出自で「内なる余所者」視されてきたからに他ならない。

さて、連載第32回で述べた通り、ヒトは群の女性との配偶関係を禁止して「内／外」を同時に創り出し、集団間で女性を交換することで人間となった。この時、財貨、ならびにメッセージの交換も成立し、動物の自然拘束性が克服された。かくして「文化／自然」の対立が始まる。この意味で女性は常に「内なる外」であり、女性言葉による名前の便宜的変更(②)という特殊状況が生じ得る。今回はこれを見てみよう。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)